

精神科で身体拘束1万人

13年度、10年で2倍に

精神科病院で手足をベッドにへっぴりつけるなどの身体拘束を受けた患者が2013年度、全国で1万229人に上り、10年前の2倍に増えたことが厚生労働省の調査で分かった。内側から開けることができない「保護室」に隔離された患者も約3割増の9883人だった。

「保護室」隔離も3割増

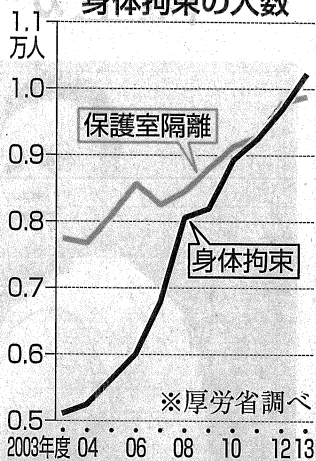
精神科病院での身体拘束などは精神保健福祉法上、本人や他人を傷つける恐れがあるなどと精神保健指定医が判断した場合に限定的に認められている。

厚生省は調査結果について「明確な因果関係までは特定できない」として「アルツハイマー

查は厚生省が毎年度実施し、入院患者数や医療従事者数、病床数などを集計。データがまとまった

13年度の対象は1616施設だった。その結果、身体拘束を受けた患者は1万229

患者の保護室隔離と身体拘束の人数



明確な基準必要

吉浜文洋・仏教大教授(精神看護学)の話
精神科でも認知症患者の割合は増えており、本人が治療を理解できず、協力してもらえないケースも

ある。現場には安全に治療するためであれば身体拘束もやむを得ないという雰囲気があるようだ。特に夜間は少ない人員で多くの患者を担当するため、「安全」を優先しよとして拘束や隔離を示すべきだ。

人の上ることが判明。最多は北海道の1076人で、東京の992人、埼玉の878人が続いた。また「保護室」への隔離は9883人で、最多は大阪の612人だった。身体拘束に関する調査項目は03年度に加えられ、同年度は5109人(対象は1662施設)。その後、増加の二途をたどっているという。03年度に保護室に隔離された患者は7741人だった。一方、精神科病院への入院患者数は減少傾向にあり、03年度に約32万9千人だったのが、13年度は約3万2千人減の約29万7千人となった。

アルツハイマー病 原因物質の構造変化 確認

アルツハイマー病を引き起こすとされるタンパク質「アミロイドベータ」が脳内で寄り集まる際、らせん状から直線状などに線維構造が途中で変化することを、金沢大などの研究チームが初めて確認し、9日付の米科学アカデミー紀要電子版に発表した。

アルツハイマー病はアミロイドベータが集まって線維になり、脳内に「老人斑」と呼ばれる蓄積物ができることが主な原因とされる。線維構造の違いは病状や進行の速さに影響するといわれ、アルツハイマー病の治療や予防法の開発につながる成果という。

金沢大 治療法など開発へ道

金沢大の山田正仁教授(神経内科学)らのチームは、アミロイドベータを人工的に作製。高精度で分子の動きを捉える「原子間力顕微鏡」を使って、溶液を満たした試験管の中で線維化する過程をビデオ撮影して解析した。

線維には数種類の形状があり、従来はタンパク質が集まり始めた時点で形状が定まると思われていた。今回の研究で、塩化カリウムの溶液では途中で形状変化することが多く、塩化ナトリウムでは変化が少なかった。